

花巻市博物館だより

第32号
平成24年
(2012年)
1月



蘇東坡に龍図
狩野休田清信
江戸時代
本紙82.7×33.2cm
絹本墨画淡彩 三幅対



雲龍日月図軍配
40.0×22.0cm
鑄物



黒漆地梅に龍沈金菓子盆
江戸時代中期
24.0×23.6×13.0cm
盆深3.5cm 黒漆地・木製

2012年は神話上の動物である「竜・龍」が割り当てられた辰年。中国では神秘的な存在に位置づけられており、また日本にも様々な「竜・龍」の伝説や言い伝えが存在します。

上記の写真「蘇東坡に龍図」は、中国北宋の学者で文人であった、蘇東坡（1036～1101）を描いています。左遷されて湖北省黄州に住み書齋を建てた時に、大雪が降ったという故事に題材をとったものです。

「雲龍日月図軍配」は表面が雲竜、裏面が日月となっています。柄の部分には金鍍金の上に、銅の透かしで唐草文と花菱文がつけられています。

「黒漆地梅に龍沈金菓子盆」の側面四面には龍の起す威力で波立つ様が図案されています。付属品の木箱に「明和九年」の銘があり、1772年に調べられたものと考えられます。

目次

辰づくし・目次	…………… P.1	活動レポート	…………… P.6
平成24年特別展 「吉村作治の古代七つの文明展」開催に向けて	P.2～3	コラム・行事予定	…………… P.7
テーマ展「花巻人形展-表情豊かな人形たち-」	P.4～5	収蔵資料紹介	…………… P.8



平成24年特別展

『吉村作治の古代七つの文明展』開催に向けて

はじめに

今年「吉村作治の古代七つの文明展」の開催が計画されています。ここでは、文明展開催に向けて開催の意義やその目的についてみていくこととします。

1 文明と自然

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波は、東日本各地に甚大な被害をもたらし、歴史的な大震災となりました。改めて自然の破壊力の凄さと自然の力の計り知れない威力を見せつけられました。

また、ここ数十年地球環境の変動について世界的な大問題として取り上げられております。これは、人間の作り上げてきた文明の盛衰と大きく関ると考えられます。地球環境問題は、人間の存在の根本に関する問題でありますし、文明と自然の関係も人類の歴史と深く関るといわれています。

文明は、人間の作り出したものでありますが、本来自然と人間の中で捉えられるものだと思います。自然と人間の共存が前提であるべきなのに、近代文明の成立以降、めざましい科学技術の発展と共にいつしか、人間は文明から自然を切り離すようになってきたのではないのでしょうか。

今回の特別展の意義のひとつは、文明について再考する契機にあると思います。文明の原点とも言える古代文明に触れ、数千年に及ぶ人間の営みの痕跡を実感することがこの展覧会の目的となっています。特にも未来を担う子供たちにぜひ見てもらい、学び考えて欲しいと願っています。以前は縄文文化が遅れた文化とする考え方がありましたが、自然と

の調和といった意味では、まったく異なる評価がなされるようになっていきます。こうした中から自然と人間が共存できる新たな文明を模索することになるのではないのでしょうか。

2 戦争と平和

20世紀は、二度にわたる世界大戦を経験しました。また、大規模、小規模な戦争は21世紀の今日まで引きずっております。古代においても戦争は、大きなテーマでした。戦争は経済的な背景から、思想や宗教さまざまな目的で行われてきております。こうした状況から抜け出すためには、どのようにしたらいいのでしょうか。

藤原清衡は、自ら度重なる戦乱を経験したことから、浄土思想に基づく仏国土を造るために平泉の街をつくりました。そこには「抜苦与楽、普皆平等」（あまねく平等に苦しみを去り安楽を与える）という絶対平等思想の信念が込められていました。



吉村作治の古代七つの文明展
福岡会場ポスター



アンフォラ (壺)
ギリシャ・ローマ文明 紀元前6世紀末 イタリア
H 41 cm 平山郁夫シルクロード美術館

今日のグローバル化した世界の中で、私たちが世界を見る眼の基礎となり、世界で起こっている様々な出来事を深くバランスよく理解し、私たちの社会の将来性を定めるために歴史に学ぶことは必要不可欠だと思います。

現在地球上の各文明は、グローバル化の中で平均化される部分もありますが、経済格差をはじめ格差の広がり指摘する人も多くいます。

宮沢賢治が「世界が全体幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」といいました。地球上の人間が等しく同一レベルの生活や質をもてるまで、まだまだ時間が必要であり、その為には、広い視点で各地域の比較考察が必要です。今回は、七つの地域の古代文明を比較しながら見る事が出来る意義は非常に大きいと思います。

3 展示の構成

吉村作治先生は、「どのような文明にも、自然とそれとうまく共存する知恵が広く厚く存在しなければならない。それは知であり、技術であり、教育であり、交流である。」と

しており、今回取り上げた七つの文明に、それらの典型的な要素を振り分けております。

- (1) エジプト文明：「人と空」
- (2) オリエン特文明：「人と知」
- (3) ギリシャ・ローマ文明：「人と道」
- (4) シルクロードとインド文明：「人と人」
- (5) 中国文明：「人と地」
- (6) 中南米文明：「人と水」
- (7) 縄文文明：「人と火」

おわりに

地球上の長い歴史の中で誕生したあまたの文明を横断的に展示することで、「文明とは何か」「人類はどこから来たのか」「人は何のために生きるのか」といった根源的な問いに向かい合う展示会であり、子供から大人までが「文明」の知識を得て、その意味を探ることの出来る体験型の展示会です。

(館長 高橋 信雄)



仏陀立像
シルクロード文明 2～3世紀 ガンダーラ (パキスタン)
H 94 cm 平山郁夫シルクロード美術館





平成23年度
テーマ展

花巻人形展—表情豊かな人形たち—

期 間/平成24年2月4日(土)～4月8日(日) 関連事業/展示解説会 2月25日(土)13時30分～

江戸時代から作り始められたと伝えられている花巻人形。仙台の堤人形、米沢の相良人形とともに「東北三大土人形」と称されており、江戸時代後期、全国各地の土人形の中でも優品として高い評価も得ております。

花巻人形は、表情がとても豊かで見るものを魅了し、色彩は赤・青（紺）・緑色が主体で、その中でも赤色が多用されています。梅や桜、牡丹などの花柄や鳳凰、鶴、松といった模様も描かれており、華やかさを演出し、花巻人形の魅力をさらに引き立たせています。そして、内裏雛を中心とした、信仰・縁起物、歴史上の人物、説話や昔話、風俗もの、動物など広範にわたった題材が取り上げられ、多種多様な人形の種類を特徴とした花巻の郷土人形です。

表情に注目

先ほども記述したように、花巻人形の表情はとても豊かで、様々な顔が表現されています。“人形は顔が命”という言葉もあるように、凛々しい顔もあれば、おどけた顔や優しい笑顔にさびしそうな顔も中には見受けられ、なかでも笑顔が非常に多く、この表情を見ていると心を穏やかにしてくれます。

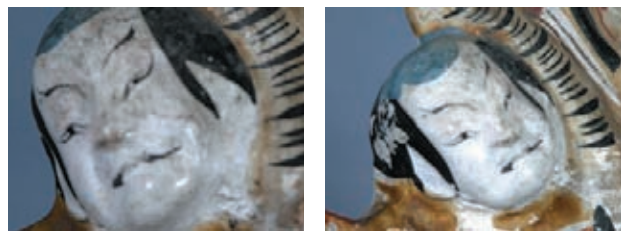
また、上下左右と見る角度を変えることにより、違う表情が現れ新たな発見があり、花巻人形の奥深さを感じることができます。



花車部分



谷風部分

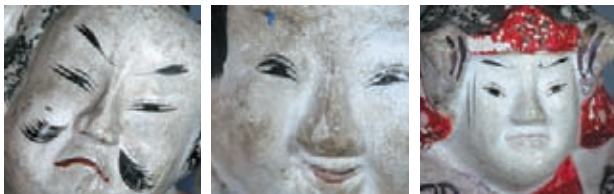


和藤内部分

この表情に注目し、様々な角度から花巻人形を鑑賞してもらえれば、また一つ、素朴な土人形の魅力に引き込まれていくのではないのでしょうか。

ヘラ書き

花巻人形の最盛期は文化・文政時代から天保年間にかけてと考えられています。「甕割りかめわり温公おんこう」に、「天保十四年癸卯二月」と「丹二」の名前と「一輪」のカマ印が右図のように陽刻ようこくされています。さらに、当館に寄託されている人形型の表面に当時の出来事や物価、米の作柄、気候等をヘラ書きしたものがあり、金石文きんせきぶんとして一級の資料価値があります。



熊谷直実部分

綱抱き部分

武将部分



獅子舞部分

春の宵部分

男雛部分



甕割り温公



甕割り温公 裏面

今回の展覧会では、人形の型に彫られているヘラ書きから、型の制作年代を一覧にまとめ、当時どんな出来事があったのか、お米はいくらだったのかなど紹介したいと考えています。

この型の制作年代がわかることにより、型からとった花巻人形の制作年代も特定でき、花巻人形の研究が一步進むのではないかと思います。



招き猫型 (前)

「盆ニ至ルテモ 稲ノ穂は出ズ 不模様ナリ」



座る人型 (後)

「明治三十九年 六月五日 米十五銭 阿王十四銭同年稲作模様 大きによろし 此年常舞臺 建築」



恵比寿顔型

「大正四年 旧九月廿九日 白米十式銭 農作良好」

●花巻人形絵付け体験

平賀工芸社の平賀恵美子氏を講師に向かえ、今年の干支・辰等に絵付けをします。絵付け用の素焼き人形、筆、顔料等の道具類は当館で準備します。素焼き人形は、平賀さんの手作りですので数多くは準備できませんが、どの人形に絵付けをするか、人形を選ぶのも楽しみのひとつです。平賀さんの指導のもと、自分の人形をつくってみませんか。

日時 3月24日(土) 午後1時30分～3時

会場 花巻市博物館 講座・体験学習室

料金 1,500円

人数 先着40名

予約 事前に申し込み下さい。

TEL 0198-32-1030 まで

(学芸員 小原 伸博)





活動レポート

「昭和は遠くなりけり」

－『懐かしの写真展』余話－

今回は昨年11月3日に開幕し、好評を博しているテーマ展『懐かしの写真展』についてのこぼれ話をご紹介します。

このテーマ展は、「今流行っている、昭和30年代の映画みたいな展示会してほしい」との市民の皆様からの要望を基に企画したものです。

展示写真は、旧1市3町の広報係や教育委員会が保管していたアルバムやフィルムからのものに加えて、お二人の市民のご協力を頂き、昭和30年代から40年代を中心に一部20年代や50年代の各地域の町並みや風景、催し物等80点を選択しました。

展示に当たっては、キャプションに正確な年代が付けられるよう努力しました。ところが、いざ調べてみるとこれが中々分かりません。

画面の端に写っている映画のポスターをルーペで覗いて「おっ、『渡り鳥故郷に帰る』小林旭だ。こっちは『ゼロ戦黒雲一家』って読めるけど、石原裕次郎か？すると1962年、昭和37年だな」と言った作業をしました。

また、写っている場所が何処なのかの特定も困難をきたしました。商店の看板を頼りに

撮影場所を割り出していくのですが、50年も前の町並みは変貌が著しく、所謂町内の物知りお爺さんやお婆さんにお聞きしても「う～むっ、一昨年亡くなったあの爺さんなら分ったがも知れねな」と言う様なこともしばしばでした。

それでも、来館者の方々の中には「あれ、これおれの親父だじゃ」とか「この人あそこのおん爺さんだ。ありゃ、たいした若へどきだあ」と言ったお話なしを耳にする機会もありました。さらに、「あっ、これ小学校6年生の時のおれだ」と自分自身を発見する方もおられました。

また、「笑顔の写真が多くて、見ているこちらも楽しくなりました」とアンケートに書いてくれた小学生の女の子もあり、展示会を企画した側としては、とても元気をもらった思いです。

事ほど左様に、昭和の記憶はどんどん薄らいでいきます。しかし、展示された写真を見たとき、なんとなく心和む気持ちがあるのは、その被写体が過去というフィルターによって美化された心象風景に変わっているからかも知れません。

今回ご紹介できなかった写真は、まだまだたくさんあります。薄っすらとほこりを被った記憶によってインスパイアされるこの企画を今後も続けて行きたいと思っています。



大迫町 市日の風景 昭和40年代



石巻谷町スーパーマーケット店頭 昭和40年代

川崎巨泉(1877～1942)は、郷土玩具画家である。堺市に生まれ、浮世絵師の中井芳滝に師事し浮世絵の手法を学んだとされる。巨泉は、明治36・7年頃より全国各地を旅して郷土玩具に興味を抱き、近代化のもとで廃れいく郷土玩具のもつ庶民美を高く評価し、多くの郷土玩具を描いた。

『巨泉玩具帖』は、大正8年から昭和7年にかけて玩具・縁起物・絵馬・お守り・雑器の類を巨泉が彩色写生画にした画帳である。全部で60冊あり、この中に花巻人形が登場する。この画帳は、現在大阪府立中之島図書館に収められている。

『巨泉玩具帖』に描かれている花巻人形のひとつに「蛸と子供」がある。巨泉の描いた花巻人形は、男雛、女雛のほか大黒天、達磨、三番叟、犬、猫、鶏などさまざまである。

「蛸と子供」は、当館所蔵の「蛸担ぎ童子」に極めてよく似ている。なぜ蛸なのか?前から気になっていた。最近、可児弘明氏の見解を知り納得した。蛸には、人間の体内

から毒気や膿を取り除く効験、ひいては諸病を癒して身体を健全に維持する呪力が仮託されていたのではないかとするのである。さらに『巨泉玩具帖』には、花巻人形の「経乗り蛸」が描かれていることに着目し、「蛸担ぎ童子」と「経乗り蛸」はセットだという。

京都の妙心寺、通称蛸薬師堂には、本尊石仏「薬師瑠璃光如来」にまつわる霊験譚があるという。鎌倉時代に寺の僧侶が、病気の母を寺に呼び看病していたところ、母が蛸を食べれば病が治るかもしれないといったという。僧侶は、母の願いを断ることが出来ず、市場で蛸を買い箱に入れてきた。人々は僧侶が生魚を買ったことを怪しみ、門前で箱の中を見せると責めたという。僧侶が、薬師に願ったところ、蛸は八巻の経巻になり、霊光を四方に放ったという。

花巻人形の特徴のひとつは、種類が多いことにある。そこにはまだまだ興味深い逸話が隠されているようである。(館長 高橋 信雄)

平成24年1月～3月の行事予定

- 企画展示室**
- テーマ展「懐かしの写真展」
～1月15日(日)まで
 - 共同企画展「ぐるっと花巻・再発見!」
—花巻の大工たち—
～1月15日(日)まで
 - テーマ展「花巻人形展」
—表情豊かな人形たち—
2月4日(土)～4月8日(日)
展示解説会2月25日(土)13:30～

- 講座・体験学習室**
- 1月7日(土) 勾玉作り
 - 1月8日(日) 琥珀玉作り
 - 1月21日(土) 館長講話5「古代の文明②」
 - 1月28日(日) 古文書解説会
「鍛冶町焼古館家文書を読む」
 - 2月11日(土) 博物館講座4「花巻人形について」
 - 2月18日(土) 古文書解説会
「鍛冶町焼古館家文書を読む2」
 - 3月3日(土) 古文書解説会
「鍛冶町焼古館家文書を読む3」
 - 3月17日(土) 館長講話6「古代の文明③」
 - 3月24日(土) 花巻人形絵付け体験
 - 3月31日(土) 琥珀玉作り

時間はいずれも
13:30～

常設展料金で見学できます。

※内容に変更がある場合があります。

詳しい内容は、花巻市博物館へお問い合わせください。

花巻市博物館

〒025-0014 花巻市高松第26地割8番地1
電話:0198-32-1030 FAX:0198-32-1050
開館時間:午前8時30分～午後4時30分

入館料	小学生・中学生	150円(100円)
	高校生・学生	250円(200円)
	一般	350円(300円)
※ ()内は20名以上の団体料金 ※ 割安な近隣4館共通券もあります。 ※ 特別展示を行う場合、入館料を別途定める場合があります。		

<http://museum.city.hanamaki.iwate.jp/>
museum@city.hanamaki.iwate.jp

交通案内

- 東北新幹線 新花巻駅より
1Km(車で約3分)
- 東北本線 花巻駅より
8Km(車で約15分)
- 花巻空港より
6Km(車で約10分)
- 金石自動車道 花巻空港I.C.より
3Km(車で約5分)
- 東北自動車道 花巻I.C.より
9Km(車で約15分)
- 東北自動車道 花巻南I.C.より
9Km(車で約15分)
- バス
東北本線 花巻駅から晴山行き。
停留所は「賢治記念館前」です。





収蔵資料紹介



南部利直黒印状

16.5 × 43.0 cm 岩間豊子氏寄託

猶々馬之飼料被下
馳走可申候、以上
相模殿御馬上り
馬引四拾人、伝馬
五足可出候也
慶長拾七年
七月廿七日⑩
中野吉兵衛
北松斎

この書状は、南部利直^{なんぶとしなお}（1576～1632）が慶長17（1612）年7月27日付けで、中野吉兵衛^{なかのきちべえ}（1580～1624）と北松斎^{きたしょうさい}（1613年没）あてに出した書状です。読みは左の通りです。文中にある「相模」とは大久保忠隣^{おおくぼただちか}（1553～1628）のことです。忠隣は天正16（1588）年に治部少輔、慶長5（1600）年には相模守と称した人物で、徳川家康^{とくがわのしょう}（1542～1616）の近習^{きんじゅう}から将軍秀忠（1579～1632）の下で老中を務めました。

書状の文面は、忠隣の部下が盛岡で馬を買いあげて戻る際、馬引き40人と伝馬^{てんま}（公用で請け負う荷物運搬）5頭を出して対応するよう命じ、また「猶々…」の2行では飼料と食事の提供を命じています。宛名の中野吉兵衛は、紫波郡の郡山城（1667年廃止、現在は高水寺公園）の城代、北松斎は花巻城代をそれぞれ務めていました。盛岡藩は馬の名産地として知られ、江戸時代初期から幕府の馬買い付け役人が訪れています。忠隣は幕府側の窓口であったようです。『御当家記録』（平沢親常編、1975年刊）には松斎にあてた卯月（旧暦2月）25日付けの忠隣の書状が収録されています。その文中に「御馬御用に付て毎年の如く太田甚四郎・木村九郎左衛門を指し下らせ、其元然るべく御馳走^{ごちそう}尤も候…」とあり、感謝の弁が述べられています。また同書には将軍秀忠からの書状4通も記載されており、江戸時代初期松斎の名前は幕府内でよく知られていたことを物語っています。

（学芸員 小原 茂）

